

Eureka VII

六年制通信 No.27 令和2年12月11日(金)号

好きなことをして生きる

若者は、好きなことをして人生を送りたいと思っているのではないのでしょうか。好きなことだけをして生きていきたいと願っているでしょう。しかし一方で、中高生にもなれば、世の中は思い通りにはならないということを思い知らされてもいるでしょう。それより、そもそも、その好きなことが見つからない、自分がいったい何を望み、何に向いているのか、それすら見つけられないでいる、そんな状態ではないのでしょうか。若者の持つ、将来に対する漠然とした不安というのは、実はそんなところにあるのだと思います。目標を持つようになった友だちをうらやましく感じ、夜中一人で劣等感に涙するのもこの時期です。一時期「モラトリアム時代」という言葉が流行しました。モラトリアムとは「執行猶予」のことですが、大学の4年間を社会に出るための猶予期間と位置づける、新たな価値観だと言われました。特に勉強したいことなどないのに大学に進学する若者が増えてきたので、大学の存在意義を新しく求める風潮が出たのです。私は、大学は猶予期間であってはならないと思います。私たち大人は学生に「勉強だけをしていてよい」自由を与えているのです。本当に幸せな国だと思います。ですから、その自由を受けるか受けないかは、自分の求める勉強があるかないかで判断すればいいと思います。就職までのモラトリアムのために学生時代を使うべきではありません。勉強したい学問が見つからなければ社会に出て働くべきです。

19世紀の末にドイツに生まれ、20世紀を代表する哲学者となったハイデガーの代表作は未完の大書『存在と時間』ですが、この本を読みたいという、ただそれだけの理由で大学に入り、やがて哲学の教授になった人がいます。その木田教授の『闇屋になりそこねた哲学者』を最近読み返したのですが、人間は好きなことならこれほどの勉強ができるのだということを改めて教えられました。大学に入って念願の本を手にとったわけですが、一読して自分には分からないということが分かった、と言っておられます。そしてそこからまた勉強が始まるわけですね。ハイデガーが分かるには、フッサールもカントもニーチェも分からなければならぬ、ということが分かったと。その勉強もしなくてはならない。そしてハイデガーについてやっと何かを言えるようになるには30年を要したとのことです。木田先生の場合、最初の設定というか挑みたい対象がものすごく高いところにあるわけですが、求める気持ちの強さがあるから、山の頂に至る困難をものともしないわけです。そもそも東北大学への進学を決意してから、受験科目だった英語と世界史の勉強を短時間で行わなくてはならなかったのですが、入学後はハイデガーを読むために今度はドイツ語を急いで習得しなくてはなり

ません。3ヶ月のドイツ語訓練で3年やった連中より読めたと言いますから、その勉強ぶりが想像できますね。ちなみに、中1から高3までの英語を2週間で上げたそうです。これ、大げさに聞こえるかもしれませんが、たぶん事実です。何の本だったか忘れましたが、先生の勉強法が書いてあったのですが、大切な本はまず1ページ目を読む、次に2ページ目を読むときには1ページ目からもう一度読む、3ページ目に入るときにはもう一度1ページ目から読む、というふうに、ページをめくるたびに最初から読み直していくのだそうです。そうすると一冊くらいすぐ覚えますよ、と書いてありました。この勉強法には、私も驚きました。

さて、上に挙げたのとは別の本で、先生は好きなことをして生きるのが一番だとしながら、若者に対して次のように言っておられます。……好きなことをして生きるには、まず自分の好きなことを見つけなければなりません。「やりたいことが見つからない」「好きなことがない」などという若者がいますが、なにかを好きになるというのは、努力して身につけるべき能力なのです。……つまり、好きなことが向こうから転がってくるわけではなくて、努力して身につけるのだと、それは一種の能力だと言っているわけです。また、与えられるものが多いと、心から欲求するものが少なくなるからよくないと警鐘を鳴らしておられますが、これはむしろ親や教師に耳の痛い話ですね。若者は目標ができれば、あとは一所懸命に勉強するだけです。その努力は自分の人生を変える努力です。やりがいのあるものです。だからこそ、好きなものを目標にしないでなりません。こうなりたい、もっと理解したい、あれが読めるようになりたい、何でもいいと思います。よく見、よく聞き、よく考え、今の勉強を熱心にすればきっと見つかると思います。自分の人生を支える「好きなこと」を手に入れるべく努力してください。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』（光文社）

東野さんの新刊、書下ろしです。相変わらず、よくこんなプロットを思いつくものだと感心しながら読みました。伏線もお見事。コロナ禍の辺鄙な観光地が舞台。その町出身の人気漫画家と、そのキャラクターを町おこしに使いたい元同級生たち。彼らの恩師が何者かに殺され、その娘と弟（娘の叔父ですね）が事件解決に挑む。

本の表紙に **the murder in an obscure town** とありまして、ほほお「名もなき」は **obscure** かと辞書を引いてみました。なるほど普通「不明瞭な」と覚えますが、確か「無名の作家」は **an obscure writer** でしたかな。この単語は語源的には「隠されたもの」という意味で、そこから「暗い」「曖昧な」「不明確な」「世に知られない」などに用いされるようになりました。ちなみに名詞形の **obscurity** が「無名の人」の意味で初めて使われたのは1822年だそうです。

東野さんの作品は出るたびに楽しく読んできました。今、テレビで「危険なビーナス」が流れていますね。来週最終回じゃなかったかな。これも面白いよね。

BGMは 安全地帯 の 悲しみにさよなら でした…。